



とのことです。さらに漏れ聞くところでは、工事に時間がかかる天神峰地区の谷津の埋め立てと、小見川県道の滑走路との交差部分のトンネル工事をこの秋にも始めようとしているとのことです。杞憂とは思いますが私たち運輸省・公団がこの工事に突入する無謀を恐れます。なぜなら私たちは上に申したとおり土地を譲り渡す意志はなく、空港絶対反対を曲げるつもりなく、したがって平行滑走路は完成せず、資金の投入は税金の無駄遣いになるからです。

思い起こせば一九八六年秋、

公団は土地買収受けのめどがなままで空港二期工事に着手しました。このとき「農家の軒先まで工事を進めて、ご理解をえる」などの発言が公団幹部からありました。工事の進展を買収に応じない農民に対する脅しを使つたのです。今回は運輸省と公団は繰り返し「地元の同意を得たうえで」「協力をえて工事に着手する」と言つていますので私はあらためて、平行滑走路・同関連施設の見切り着工に反対します。

3 運輸省と公団は二〇〇〇年

度完成という自ら定めた期限に大変大切と痛感(第十一回シンボ航空局長)したにもかかわらず、九六年十二月に地元地権者・関係者にはかることなく一方的に期限設定したものです。このような二〇〇〇年度目標が当事者である私たちへ強いられるのははなはだ迷惑です。また二〇〇〇年度目標のために合意作成がざんになつたり、空港建設の手順がさかさまになつたり

4 東峰共同墓地の地中深く土葬された小泉よねは第一期工事で唯一強制的に家や田など生活のすべてを根こそぎ奪い取られました。赤土の中に眠つて二十五年が過ぎ去り、肉体はすでに土に還つたとしても無念の思いは消えようがありません。

成田市取香字馬洗にあつた小泉よねの家や風呂、庭木など地

なされていふことを読者も同意されたものと思う。筆者にはこうした言動の中に、先の判断の公平性の危うさが現れているようと思われる。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

5 七月には運輸省と公団は地域と共に生するを港作り大綱」では県や周辺自治体、住民団体との間にはいくつかの施策を講じて空港建設の合意を作り共生をはかるうとしています。

唯一代執行を免れた畠も事実をねじ曲げた証言をかさに強制的

「臓器移植法」の施行から一年が経過した。今(九月十五日現在)のところ「脳死」移植の実施例はないようであるが、どうからず一例目が実施され、やがてそれが日常化するものと思われる。

筆者は「脳死」臓器移植の是非については、医療専門家の判断が優先されるべきだと考える。専門化の集団的合意として「脳死」移植が是認されるのであれば、筆者はその判断が尊重されるべきだと考える。ただし公平な判断ができる。

ところで、移植医療上の必要のための「脳死」者からの臓器摘出を合法化するのに社会通念上の死の定義、すなわち心臓死を非科学的な感情論と形容したり、「和田移植」を根拠とした心臓移植に対する全否定的見地を個別特殊例から全体を判断する大人げない過剰反応をしたりする言動が、医療専門家の間から繰り返しなされてきたし現に

なされていふことを読者も同意されたものと思う。筆者にはこうした言動の中に、先の判断の公平性の危うさが現れているようと思われる。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

実は医療専門家ほどこのことを身にしみて自覚しているはずがつて、「心臓死」が生物学的な個体死の十全な定義足り得ないことを期待してではなくて、患者の関係者がその「死」の過程であつて、一度も十全には手に受け入れられるようにするたまに心停止の患者に必死の蘇生を試みるのは通常本当に蘇生するのである。むしろ死が一つなら、なるほど心臓死の後にも体毛の成長する事実を開けた冷静を失いたい「過剰反応」に過ぎないのだろうか。これもまた冷靜を失いたい「過剰反応」に過ぎないのだろうか。

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

## 「臓器移植法」施行1年に思う

の乏しい心疾患患者に移植を強行して、結果として提供者、被移植者の双方が死亡するという悪質な、そして何より反医療的なものだったことは、どうやら確実なようである。

同時に、和田移植は一事例であると共に全事例なのである。すると、そのような死の定義が結局はある。通常割合欠陥なら全否定は移植者の双方が死亡するという悪質な、そして何より反医療的なものだったことは、どうやら確実なようである。

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

公団は土地買収受けのめどがなままで空港二期工事に着手しました。このとき「農家の軒先まで工事を進めて、ご理解をえる」などの発言が公団幹部からありました。工事の進展を買収に応じない農民に対する脅しを使つたのです。今回は運輸省と公団は繰り返し「地元の同意を得たうえで」「協力をえて工事に着手する」と言つていますので私はあらためて、平行滑走路・同関連施設の見切り着工に反対します。

3 運輸省と公団は二〇〇〇年

度完成という自ら定めた期限に大変大切と痛感(第十一回シンボ航空局長)したにもかかわらず、九六年十二月に地元地権者・関係者にはかることなく一方的に期限設定したものです。このようないくつかの施策を講じて空港建設の合意を作りがざんになつたり、空港建設の手順がさかさまになつたり

4 東峰共同墓地の地中深く土葬された小泉よねは第一期工事で唯一強制的に家や田など生活のすべてを根こそぎ奪い取られました。赤土の中に眠つて二十五年が過ぎ去り、肉体はすでに土に還つたとしても無念の思いは消えようがありません。

成田市取香字馬洗にあつた小泉よねの家や風呂、庭木など地

なされていふことを読者も同意されたものと思う。筆者にはこうした言動の中に、先の判断の公平性の危うさが現れているようと思われる。

死の定義としての「脳死」非同意しない人々は、はたして非科学的な感情論者、なのである

心臓移植に対する全否定といふことは、そもそも死の了解の仕方に誤りがある。費用対効果も含めての救命医療断念の分岐点さえもが、結局の所この「感情論」の外部ではあり得ないのである。

以上、声明します。

一九九八年十月五日 成田市東峰区 区民・関係人一同

では何のためのシンボル車だ

たのかということになります。

当事者無視の二〇〇〇年度完

成目標を取り消すことを求めま

す。

では何のためのシンボル車だ

たのかということになります。

一方敷地内農家・地権者に対し

排ガス、熱風、地下水低下、検

問、交通渋滞、おまけに鉄パイ

と番線による村の囲い込み、

やぐらからのガードマンによる監視まであります。私たちから

しても空港は共生できる相手で

はありません。

運輸省・公団はここに東峰地

事で唯一強制的に家や田など生

活を丸ごと破壊して、その金額

でどんな生活重建の途があるの

でしよう。しかもそれは仮補償

のようないいにおこなうことが

あります。

小泉よね問題は何一つ解決していません。この問題は東峰のわ

ねに対する差別と蔑視の感情、

われわれ一人ひとりにつながる問

題です。この解決無くして平行

滑走路問題を口にすることがで

きるでしょうか。

小泉よね問題は何一つ解決していません。この問題は東峰のわ

ねに対する差別

評  
書

荒岱介著

# 行動するエチカ（社会思想社）

深山和彦

この本の中身は、荒岱自身が

「あとがき」で要約している。

二十世紀文明を支えてきた功利主義もマルクス主義も生産力思想であり、それでは最早地球文明そのものの行き詰まりを開拓できない。むしろイギリスの経験主義に学び直し、J.S.ミルからジョン・ロールズなどの問題意識をおさえつつ倫理学

の方向へ向かうべきだというのが著者の主張です」と。マルクス主義を捨て、これからはブルジョア・イデオロギーでやつて表明である。

あまりの率直さにあきれるばかりであるが、彼の新たな船出に際し、一言添えておこうと思

## 唯物論的歴史観について

荒岱は、次のように語っている。

「いわゆる『マルクス主義・エンゲルス主義』は、社会の生産力の発展を最高善とするという価値観、実際には資本主義での功利主義と何ら変わらぬ発想において問題を捉えていたとしか言えません。そしてそれは人間に悲劇のみをもたらした。その結果生じてしまったのが、地球環境破壊という取り返しのつかない現実です」と。

大目標は、生産手段の私的所有を廢止して、人が分業に隸属することのない、生きための経済活動に縛られることさえない社会を建設すること、すなわち能力に応じて働き、欲求に応じて働く「各人の自由な発展

が、万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会」（共产党宣言）を建設することである。そしてマルクス主義は、その実現の必然性を明確にする際

としての唯物論的方法において、「生産力の発展」を次のように位置づけてきた。

荒岱は、次のように語っている。

「精神的諸感覚、意志や愛などの実践的感覚、意志や愛などの実践的感覚」の「共有化」、「正義」とか「倫理」というものは、賃金奴隸制を前提としているのである。

彼は、「社会生活には役柄・役割的なヒエラルキーは必ずある」とし、これと「身分的・宗教的・道徳的なヒエラルキーはわけて考えるべき」だと語っている。

彼は、「社会生活には役柄・役

内実を示すものだ。

ロシアの経験は、生産手段の国有化が、官僚ブルジョアジーの形成と権力篡奪、賃金奴隸制の存続、国際分業への諸民族の隸属構造の拡大などと何ら矛盾しないことを示した。われわれは、生産手段を国有化するだけではなく、私的所有の残滓を消滅導くところの人々が分業に隸属し、生存のための経済活動する人々の分業への隸属構造は廃絶できないとし、社会革命を放棄しているのである。そして、

本主義社会は、その究極形態に他ならない。

「物質的生活そのものの生産」における変動は、今日の労働手

段発達が、筋肉労働の代替を本質とする機械の発達というレベルから精神労働を代替する装置の発達へ移行したという点にある。これからの労働現場において見ることができることである。

「物質的生活そのものの生産」の営為ならびに既得の充足用具が、新しい欲求へと導く。資本主義社会において継続的に産

求そのものが、すなわち、充足

のための活動に多くの時間を割かなくて良くなる。

もちろんこのような労働手段の発達も、ブルジョア社会においては、資本がそれを労働者に

対する支配と搾取の強化に利用することを、全く妨げはしない。

しかし、「充足された最初の欲

求そのものが、すなわち、充足

のための活動に多くの時間を割かなくて良くなる。

もちろんこのような労働手段

の発達も、ブルジョア社会においては、資本がそれを労働者に

対する支配と搾取の強化に利用することを、全く妨げはしない。

しかし、「充足された最初の欲

求そのものが、すなわち、充足

のための活動に多くの時間を割かなくて良くなる。</

史的制約から自由ではなかつた。共産主義者は、過去を総括し進むべき道を定め直すことが求められている。だが荒氏は、その歴史的制約性を歴史的制約性として唯物論的に捉え返すのではなく、それをマルクス主義の根本的誤りと描き出し、マルクス主義を清算してしまった。

そして、観念論の世界、ブルジョア・イデオロギーの世界へと逃亡したのである。

なお、各人の自由な発展という新たな社会の規定的目的は、真に個人主義を克服した態度を導く。

個人主義的態度は、私有財産

本年は、マルクスとエンゲルスによる「共産党宣言」が発せられてから百五十年になる。この間、共産主義運動は人類のその「前史」を終わらせるといった壮大な歴史上の偉業の達成の道程において、その運動の一サイクルの敗北的終焉とともに、まさにプロレタリアートに次の具体的・実践的な課題を突きつけることにより、歴史の歩みを進められた。社会主義革命の課題、その果たさねばならない内実がより明確に提起されたというそのことと自身が、マルクスがいよいよにその解決の力をプロレタリアアが手に入れたというこの証明に他ならないからである。

今日の事態に動転している早くマルクス主義を放棄し様々な小

ブルジョア・イデオロギーへの逃亡を始めた。しかし、それらの

(3面より続く)

史的制約から自由ではなかつた。共産主義者は、過去を総括し進むべき道を定め直すことが求められている。だが荒氏は、その歴史的制約性を歴史的制約性として唯物論的に捉え返すのではなく、それをマルクス主義の根本的誤りと描き出し、マルクス主義を清算してしまった。

そして、観念論の世界、ブルジョア・イデオロギーの世界へと逃亡したのである。

なお、各人の自由な発展とい

う新たな社会の規定的目的は、真に個人主義を克服した態度を導く。

個人主義的態度は、私有財産

をめぐる争いと結びついている。だけでなく、人々の分業への隸属構造が作り出すヒエラルヒーの中での特權的分業領域にのしかかりその地位を防衛しようと求められている。だが荒氏は、その態度と結びついている。社会の特定の人々が特定の活動領域に固定されるとき、他の人々がその領域に進出し、自己の発展を計ることができない。一人ひとりが自由に発展して初めて、全ての人々が自由に発展できるようになる。人々の自由な発展が実現されるには、階級社会において上位に位置づけられてきた社会的諸活動領域に人々が進出できるようになるだけだ。

同時に、階級社会において

社会においては、全体と個の対立は止揚されている。経済的土台における革命を基礎にして初め、「功利主義」も一掃できるのである。

また人間の自由な発展を目的とする社会の建設は、自ずと自然環境の豊かな発展をその内に含むものとなる。利潤を目的とする経済的土台を前提に「環境倫理」を唱えて、それは一つ

の欺瞞である。このような欺瞞は資本家自身が、「環境にやさしい」とか「持続可能な」とかの形容詞を多用しているように、単に口先だけでなく必死に実践していることである。ブルジョ

ア・イデオロギーは、この「調和が生まれることを不可欠とするのである。労働時間の大幅な短縮がその条件になる。こうした社会においては、全体と個の対立は止揚されている。経済的土台における革命を基礎にして初め、「功利主義」も一掃できるのである。

また人間の自由な発展を目的とする社会の建設は、自ずと自然環境の豊かな発展をその内に含むものとなる。利潤を目的とする経済的土台を前提に「環境倫理」を唱えて、それは一つ

の欺瞞である。このようないい加減な言葉で、荒氏は、次のように語っている。

「自然と人間と社会とは一体であり、心も体も一体であるということです。地球と個人は統一されてあり個々バラバラな存

在なのではなくまさに梵我一如である。また人間どうしも連帯し協働しあう存在であり、協働の下に生活世界を構築する

ことである。また人間どうしも連帯し協働しあう存在であり、協働の下に生活世界を構築する

ことである。また人間どうしも連帯し協働しあう存在であり、協働の下